

## 6月2日 キリストの聖体

創 14:18～20    Iコリ 11:23～26    ルカ 9:11b～17

### 1. ルカ

v.16 「すると、イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた。」

ユンクマンは彼の著書の中で、奉献文の解説をするに際して次のように書き始めています。“ミサの主要部分が形成されるとき、本質的な核になったものは、キリスト自身にさかのぼるものである。それは最後の晩餐で制定されたいきさつの叙述である。…… 感謝の祭儀は、このいきさつが新約聖書に書きとめられるよりずっと以前から、ささげられていた。”(ミサ p.235)

そのような初代教会の時代の人々が、福音書のこの物語りによって何を理解し、何を信じたかを考えようではありませんか。イエスは彼の後を追って来る群衆に、神の国の福音を宣教しておられました(4:43, 8:1, 9:2,11, 10:9, 11:20, 12:31-32, 16:16, 他)。それは地上の国々のようなある領域を指しているのではなくて、神の支配の到来を意味する終末的な、近づきつつある出来事を指していて、キリストの血による契約はこれに与る人々を「終わりの日に(神の国に)復活させる」(ヨハ 6:54)ということ、彼らは理解し信じたのです。

司祭と聖体奉仕者たちが一人一人の信者に授けるものは、イエス御自身が十字架上でささげられたいけにえの“秘跡的再現”であって、これだけが唯一の“まことのいけにえ”(第三奉献文)であることを、現代の教会は再確認しなければなりません。私たち信者はこの“まことのいけにえ”を共にささげる“祭司の民”とされたのであって(黙 1:6, Iペト 2:5,9)、私たち自身のささげものは“この御子の奉献に一つに結ばれて”(主の洗礼の祝日／奉納祈願)、いわば添えてささげられる従属的な供えものに過ぎないことを忘れてはなりません。

人間がささげる善意や奉仕、社会的あるいは政治的諸活動、その他どのような働きも、それによって神の国を建設したり、その実現を促進したりするものではないことを、…… そうです、そのような誤った宗教理解は聖伝と聖書が証しする使徒たちの宣教とは何の関係もないことを、神はキリストの聖体の祭日の朗読配分を通して私たちに語っておられるのです。

### 2. Iコリ

v.26 「だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。」

主が来られること(終末の日のキリストの再臨)、これがその日に私たちが御国を受け継ぐ“キリストの血による新しい契約である”ことを、共にミサをささげるカトリックの子らは、いくら理解しても理解し過ぎる

ということはありません。ミサにおいて、特にその中の感謝の典礼において、やがて神の国で天上の典礼に集まる“その衣を小羊の血で洗って白くした大群衆”(黙7:9,14)が、姿を現すのです。カトリックの子らは、共にミサをささげる度毎に、“天上の典礼を前もって味わい、これに参加している”(典礼憲章8)のです。

“交わりの儀”を個人的信心として理解するのではなくて、キリストによる救いの共同体性に目覚めるようにという典礼刷新の意図を、故土屋吉正神父はその生涯を通して、熱心に説いて止みませんでした(典礼の刷新 p.225 参照)。今もその志は、オリエンズ宗教研究所を通して受け継がれています。

### 3. 創

v.18 「いと高き神の祭司であったサレムの王メルキゼデクも、パンとぶどう酒を持って来た。」

キリストはメルキゼデクと同じような永遠の祭司とされた(ヘブ5:10, 6:20, 7:22)という理解が、ローマ典礼の奉献文に独特の象徴的な表現を生み出したと考えられています。神がかつてメルキゼデクの供えものを受け入れられたように、「あなたの教会のささげものを顧み、み旨にかなうまことのいけにえとして認め、受け入れてください」(第三奉献文)、あるいは「あなたの栄光に輝く(天の)祭壇に」運び上げてくださいという嘆願(第一奉献文)がそれです。

「このようにして、イエスはいっそう優れた契約の保証とされた」(ヘブ7:22)、「このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられた」(ヘブ7:27)、「キリストは唯一の献げ物によって、聖なる者とされた人たちを永遠に完全な者となさった」(ヘブ10:14)ことを、私たちはキリストの聖体の祭日に、声を合わせて賛美します。このカトリック教会の典礼の“伝統の中での刷新”を、皆で感謝しましょう。

アーメン、ハレルヤ。

## 6月9日 年間第10主日

王上 17:17~24 ガラ 1:11~19 ルカ 7:11~17

### 1. ルカ

v.15 「イエスは息子をその母親にお返しになった。」

ルカ福音書が、明らかにエリヤとエリシャの物語り(王上 17:23、王下 4:36)を念頭にこのイエスの奇跡を記述していることに、私たちは注目しなければなりません。それは全く神学的な意図で書かれているのであって、私たち信じる者を御自分の復活に与らせてくださるキリスト(ロマ 6:3-11, 8:11、コロ 3:1-4)が、「来るべき方」(7:19)として、確かに来られたという事実を証言しているのです。

キリストの福音の力は、何よりも先ず“死者の復活と来世の命を待ち望む”希望にあることを(フィリ3:20-21)、現代のキリスト者は再認識しなければなりません。なぜなら近代のキリスト教は福音を分かりやすく説明しようとして、福音からその本来のつまずきを取り除いて来たからです。大切なことは“キリストの福音につまずかない”(7:23)ことであって、決して福音固有のつまずきを取り去ることではないのです。「わたしはその人を終わりの日に復活させる。」(ヨハ 6:54)「わたしは復活であり、命である。」(ヨハ 11:25)「わたしたちは、このような希望によって救われているのです。」(ロマ 8:24) このような福音の理解の線上で、ルカは“死にかかっていた部下の癒し”(7:2-10)に連続して、この“やもめの息子を生き返らせた話”を記述したのだと思われます。

復活して天に上げられ、神の右の座に着かれたキリストが今も、使徒たちが伝えた福音の宣教と共におられることを、私たちは信じるようにと招かれています。

### 2. ガラ

v.12 「わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。」

ここで使徒パウロが問題にしているのは歴史上のイエスではなくて、神の右に上げられたキリストが問題になっているということ、先ず指摘しなければなりません。しかし同時に注目すべきことは、彼はダマスコ途上の幻(死 9:1-9)で福音を知らされたのでもないということです。この一見矛盾する事実は、次のように説明されなければなりません。

パウロは回心後、ダマスコにおいて、すでに当時この地方に広まっていた“使徒の言い伝え”を学びました(使 9:19-25)。そしてその後エルサレムで(使 9:26-30)、アンティオキアで(使 11:25-26)、さらに使徒の言い伝えを受けたものと思われます。この福音の伝承の背後に天上のキリストが立っておられるという意味で、パウロはこれを“啓示による”と説明しました。つまり、それは一人の人間の私的な解釈ではなくて、イエス・キリストの啓示による福音伝承であるということです。換言すれば、この福音をさらに宣教すること自

体にも、天上のキリストが共におられるという理解なのです(Ⅰコリ11:23, 15:3 参照)。

聖書神学者 O.クルマンはこれを説明して、“使徒たちすべての共通の証言だけが、キリスト教の伝承を形成することが出来、その中に主御自身が働き給う”と書いています。それ故にパウロは、ケファ(使徒ペトロ)から“使徒の言い伝え”を受けるために、“エルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在した”(v.18)のだと考えられます。

この、彼が受け、さらに彼が告げ知らせた福音(1:8,11-12)によって、パウロは明確に宣言しました。「わたしたちは、義とされた者の(御国を受け継ぐ)希望が実現することを、“霊”により、信仰に基づいて切に望んでいるのです。」(5:5)

### 3. 王上

主日のミサで司祭は、その日の聖書の朗読配分に基づいて、使徒たちから受けた福音を説教することになっています。それは一人の人間が、キリスト教的教養によって作り出す“善いお話”“役に立つお話”のようなものではありません。そうではなくて、説教は、復活して天に上げられたキリストがその伝承の背後に立って働いておられる“伝えられた福音”を宣教することです。

一方では、それは厳しい務めであります。「わたしたち(使徒たち)があなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。」(ガラ 1:8) しかし他方、主が説教者を正しく用いてくださるときには、会衆一同は言うでしょう。

v.24 「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です。」

このような重い務めを思って、私たちは司祭のために、特にその主日のミサの説教のために、日々祈ろうではありませんか。それによって、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶために(ヨハ 4:36)。

アーメン、ハレルヤ。

## 6月16日 年間第11主日

サム下 12:7～13 ガラ 2:16～21 ルカ 7:36～8:3

### 1. ルカ

v.38 「(一人の罪深い女が・・・)、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。」

明らかに福音書記者ルカの見事な脚色が、この物語りを生き生きとしたものにしてあります。マコ 14:3-9 に語られている“主の埋葬の準備となった香油注ぎ”の話に類似していますが、その主題が“罪の赦し”になっているのです。

神が御子の死によって成し遂げてくださった和解と罪の赦し(ロマ 3:23-25、II コリ 5:18-21)を、あなたはこの女のように深く信じて、真剣に主を愛しているだろうかという問を、ルカ福音書はここで読者に提示しているのです。

イエスを食事に招いたあるファリサイ派の人は、自分は正しい人間で、この女のように罪深くはないと思っていました(v.39, 18:9-14 参照)。“彼女は罪深く心がけが悪いのだ”と見下げる図式が、如実に描かれています。現代のキリスト教界を覆っているこれに似た“律法主義的批判”が、すでに初代教会にもあったことをこの物語りは示しています。

この世は罪の支配下にあつて(エフェ 2:1-3)、神に敵対しており(コロ 1:21)、私たちにはイエス・キリストの贖いによる以外には救われる道がないということ(使 4:12)、教会は説教し続けなければならないし、信者は何度でも繰り返し聞いて行かなければなりません。

インターネットでカトリック中央協議会のサイトを訪れると、「今すぐ原発の廃止を！」という司教団のバナーがその冒頭に目立つように置かれています。しかしその主張について論じる前に、先ず私たちは考えてみましょう。我が国で、あるいは世界で、原発が廃止されれば、日本人の罪が、さらには人類の罪が少しでも減るなどと考えたら、それは全く見当違いなことです。もし、“この世界は、罪深く心がけが悪いから、正しくなるようにカトリック教会が教導する必要があるのだ”などと考えているとしたら、主はその思い上がりを叱責して語られるのです。

v.47 「赦されることの(少)ない者は、愛することも(少)ない。」

### 2. ガラ

v.16 「これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。」

古来、教会はミサの最初の部分で“あわれみの賛歌(キリエ)”を歌って来ました。これは古カトリック教会で典礼書とミサ曲がラテン語で整えられるようになる以前からのものであったために、このキリエだけは今でもギリシア語で歌い継がれています。



## 6月23日 年間第12主日

ゼカ 12:10-11, 13:1 ガラ 3:26-29 ルカ 9:18-24

### 1. ルカ

v.20 「イエスが言われた。“それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。” ペトロが答えた。“神からのメシアです。”」

このイエスの問は、現代のキリスト者である私たちこそ向けられていて、ペトロはいわば私たちすべての者を代表して“あなたは神からのメシアです”と答えていると理解することが、ここでは期待されているのです。私たちはそのように今朝の福音の朗読を聞かなければなりません。

メシアとは、新しい神の民である教会に私たちをお集めになる救い主という意味であって、当時のギリシア語に翻訳された旧約聖書(LXX)では、キリスト(χριστός)という呼称が使われていました。世間ではこの呼称をただの固有名詞のように受け取りますが、私たちキリスト者が新約聖書を読むときには、元来の“救い主”という意味でこれを理解する必要があります。

v.23 「イエスは皆に言われた。“わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。”」

私たちキリスト者は、すでに洗礼によってキリストと共に十字架につけられ、葬られた者であるということ、先ず明確にしたいと思います。キリスト者とは、日々、キリストと共に十字架につけられた者として歩んでいる人のことです(ロマ 6:4、ガラ 2:19-20, 6:14)。決して単に、“いざとなったら自分も犠牲を払う覚悟があると思っているだけ”の人のことではありません。実際、多くの信者が生涯一度もキリストのために犠牲を払うなどという大それたチャンスもなく、その人生を終えて行くのです。ただ“覚悟しているつもり”だけで……。しかしキリスト者は、洗礼の秘跡によって“共にミサをささげる(キリストの奉献に一つに結ばれる)”権利だけでなく義務をも持っているのです(ミサ典礼書の総則3)。

### 2. ガラ

v.26 「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。」

フランシスコ会訳では「キリスト・イエスと一致し」と翻訳していますが、口語訳の時代には「キリスト・イエスにあって」と直訳していました(ἐν Χριστῷ Ἰησοῦ)。これは、罪の贖いを成し遂げて復活されたキリストとの私たちの結びつきを言い表しているのであって、洗礼により、信仰によることです。それは宗教的気分や感情のような類のものではありません。

カトリック、プロテスタントを問わず、ミサ(礼拝)を宗教的気分や感情を盛り上げるための集会のように考えることが、歴史の中で繰り返されて来ました。多かれ少なかれ、私たちもそれに似た経験をして来たはずです。交わりという言葉が、「御父と御子イエス・キリストとの交わり」(ヨハ 1:3)という意味ではほとん

ど理解されず、“皆で仲良くなって同じ気分になる”ことのように解釈されてしまっているのです。

「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きる(復活する)ことにもなると信じます。」(ロマ6:8) 「このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の(国の)栄光にあずかる希望を誇りにしています。」(ロマ5:2) 「あなたがたは、…… 約束による(神の国の)相続人です。」(v.29) これは気分や感情の問題ではなくて、福音によって私たちに知らされた“キリストによって実現される秘められた計画”(エフェ1:8-14, 3:3-4)に他なりません。

カトリック教会は、使徒たちを通して自らに委ねられたこのような“信仰の遺産”を、全世界の信者がよく学び、守り、誇りにすることを期待しているのです(カトリック教会のカテキズム pp.1-6 参照)。

### 3. ゼカ

v.10 「彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ、独り子を失ったように嘆き、初子の死を悲しむように悲しむ。」

この言葉が、新約聖書で十字架のイエスを指してヨハ19:37と黙1:7に引用されたとき、教会にとってそれは悔い改めと感謝を呼び覚ます招きの言葉となりました。「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ4:25) 「罪と汚れを洗い清める一つの泉が開かれ」(v.1)、 “十字架につけられたイエスの脇腹から流れ出た血と水から”(教会憲章3) “教会が生まれたのである”(典礼憲章5)。

私たちキリスト者は、キリストと共に十字架に死んだのであって、私たちの命はすでにキリストと共に神の内に隠されているのです(コロ3:3)。そのような私たちすべての者を代表して、ペトロは今朝もまた福音書の中で、“あなたは神からのメシアです”と答えてくれていることを感謝しようではありませんか。

アーメン、ハレルヤ。



## 6月30日 年間第13主日

王上 19:16b,19~21 ガラ 5:1,13~18 ルカ 9:51~62

### 1. ルカ

v.60 「イエスは言われた。“死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。”」

新約聖書は、使徒たちとその直後の時代の人々による初期の宣教を、可能な限り正しく伝えようとして教会が編纂したものであるため、現代のキリスト者である私たちには、初代教会の人々が理解したようにその宣教を理解することが期待されています。

神の国という言葉が、イエス・キリストの死と復活によって開始され、今やその完成の日が近づいている“終末的な神の支配”という意味で、当時の教会では理解されていたということを前提にして、私たちは聖書を読まなければなりません。今朝の福音書のテキストが、「イエスは、天に上げられる時期が近づくと」(v.51)という書き出しで始まっていることに注目しましょう。キリストは御自身の死を通して永遠の贖いを成し遂げて天に上げられ、今や教会はこのキリストの最終的な出現を待っているのだ(ヘブ 1:3,10:12-13、II テモ 4:1)という生き生きとした信仰が、このテキストには煮えたぎっているからです。

しかし、すでに初代教会の時代の会衆にも、贖いや罪の赦し、神の国の約束などがよく分っていない人たちが混じていました。だからこそ、このテキストにあるような説教によって、繰り返し会衆の信仰を奮い立たせることが必要だったのです。「わたしたちはこの地上に永続する都を持っておらず、来るべき都を探し求めているのです。」(ヘブ 13:14) 「わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」(フィリ 3:20) 「あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」(コロ 3:4)

現代の教会が、“神の国のこと、死者の復活と来世の命を待ち望むこと”を、ほとんど全く語らないで、この世の正義や、この世の愛や、この世の平和だけを叫んでいるように見えるのは、もしかしたらその実態が「死んでいる者」(v.60)の側に限りなく近づいているからかも知れません。

### 2. ガラ

v.18 「しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。」

キリストが与えてくださった「自由」(v.1)とは、「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」(2:16)自由であって、「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。」(3:13) 霊に導かれて歩むとは、信仰によって義とされた生活のことであり、肉の欲望に従うとは、他人に対して誇ろうとする生き方(6:4)のことです。

私たち信者は、「恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の

賜物です。」(エフェ2:8) キリストの血による新しい契約(ルカ22:20)に与る者たちの群である教会は、キリストに、ただキリストにのみ属するのであって、私たちはそのことをミサにおいて記念します。

ですから、教会という人間集団が、自分たちの努力や能力によってこの世を神の国に“変換”させるなどというのはただの妄想であって、それは福音とも信仰とも無関係なことです。そうではなくて教会は、イエス・キリストが全世界の裁き主となり、救い主となられたという福音の宣教を委ねられたのです(使10:42-43)。「あなたは行って、神の国を言い広めなさい」(ルカ9:60)とは、そういう意味です。

### 3. 王上

v.21 「エリシャはエリヤを残して帰ると、一軛の牛を取って屠り、牛の装具を燃やしてその肉を煮、人々に振る舞って食べさせた。それから彼は立ってエリヤに従い、彼に仕えた。」

エリシャの預言者としての召しは、エリヤの説得にではなく、神の選びによることでありました。それを彼は理解したのです。エリシャは神からの召しを理解して、家とも家業とも決別して預言者としての道を歩み始めました。

恐らく、初代教会では使徒たちだけでなく信徒一人一人も皆、十字架の福音、神の国の福音を理解して、新しく出発したに違いありません。新約聖書の諸書は、そのような人々に向けて書かれました。現代のキリスト者がこれを正しく理解するには、先ず“よく読む”必要があります。しかし、聖書はただ読むだけではなくて、“初代教会の人々が理解したようにその宣教を理解する”ために、“学ぶ”ことがなければなりません。そしてこの“学ぶ”というのは、難しい学問をすることではなくて、自分で“聖書をそれ自身の前提の上で読んで読む”という姿勢を持つことなのです。

聖書をほんの少ししか読んでいないのに、自分の考えや他人の妄言の無責任な受け売りで、“キリスト教とはこういうものだ”などと語ることを、私たちは恥しむなければなりません。「わたしがあなたに何をしたというのか」(v.20)。エリシャは自分で神からの召しを確かに聞いて、新しく歩み始めました。

“御言葉はあなたの近くにある。” 聖書を真面目に学ぶ人の“口と心にある。”(ロマ10:8) 「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない。」(ルカ9:62)

アーメン、ハレルヤ。